

2009. 10. 10

No.158



編集 樋口 みな子

E-mail
 minginga@agate.
 plala.or.jp
 郵便振替
 「銀河通信」
 02740-7-56535
 (6号分1,000円)

野幌から秋の便りです

台風が去った朝、久しぶりの青空が気持ちいいです。朝晩すっかり寒くなりました。野幌では早、雪虫が飛んでいました。

さまざまな行事に追いかけてられているうちに10月になってしまいました。

最近の嬉しいニュースは、道内にあるダム計画、サンルダムと平取ダムが凍結になったこと。双方とも500億円を超える気の遠くなるような事業費です。それらのお金は福祉や医療に回して欲しいです。

下川町を流れるサンル川はサクラマスが9月から10月にかけて3000尾が遡上し、自然産卵する清流です。サンルとはアイヌ語で海に至る道という意味だそうです。私も数年前にサンル川の自然観察会でサクラマスの遡上するのを目の当たりにして感激しました。ピンクの美しい魚です。私は何にもしないサンル川を守る会の会員ですが良かった！と胸をなで下ろしました。もうひとつ、平取ダムは沙流川を利用して計画されていました。平取は私の生まれ故郷です。住んでいたのはほんの少しでしたが祖父母が暮らしていた頃、夏休みに沙流川で遊んだ大切な川です。

そのニュースから、父が何故、海を渡って平取に来たんだろうと思いを馳せました。父の故郷は福島県東白川郡矢祭町東館です。東館とは何度も聞いていたのに矢祭という地名は初めてでした。矢祭町は市町村合併をしない宣言で全国の注目を集めた町という事を知りました。最近ではもったいない図書館を建設し、全国から40万冊の本を寄贈してもらい、誰にでも開放し喜ばれているとか。父はその地で生まれ、旧制中学までを暮らしました。父母を早くに亡くしたために中学教師をしていた長兄夫婦に育てられました。(叔母も当時としては珍しく教師)



9.4 紅葉したウラシマツツジ
(ウペペサンケで)

父は戦後、北海道に渡り、何十倍という狭き門の公務員試験を受けて合格。営林署職員として各地を転々としながら定年まで働きました。

インターネットで矢祭町を調べてみました。奥久慈溪谷が、沙流川の溪谷によく似ているなあと懐かしい気持ちががしました。父は沙流川にどんなになぐさめられたらと思うました。北海道の人になって60数年。今度病院に行ったら、故郷の話聞いてみようと思っています。

病に倒れてから、むしろ父が身近になりました。家族があつての銀河通信であり、登山が出来るのだと思います。大事にしなくてとはと自らを戒めているこの頃です。

庭のナナカマドの実が色づき始めました。今年もあと少しになりました。インフルエンザが流行っています。みなさまもお気をつけて下さいね。



10.5 秋晴れの樽前山から支笏湖を望む

白神山地ブナ林再生事業に参加して

シルバーウークの9月19日から21日まで、白神山地ブナ林再生事業に参加しました。日本山岳会青森支部の主催です。1999年から始まった事業は今年で10年。白神山地に20数年前に植林された杉の除伐をして、ブナを主とする混交林の森に戻すこと。自然の恵みや大切さを、再生事業を通して青少年に体感してもらうこと。白神山地の自然に親しむこと。を目的に毎年、青森支部や、都市圏、地元の中高校生などの参加で進められてきました。

今回は各地から29人の参加で 私は初めてです。19日



樹齢20数年の杉をノコで切り倒す

8時に弘前駅に集合でしたが、フェリーが遅れて8時半に着き、一路、白神山地を東西に横切る弘西林道を車で40km以上も走ります。未舗装の急カーブに驚かされながら2時間近くもかかって奥赤石林道のゲートに10:30に到着しました。これだけでも白神山地の奥深さが理解出来ました。営林署の入山許可をもらって鍵を開けてもらっている所以他の参加者を待っての入山です。

設営は手際よく大きなブルーシートが張られ、全員が入れるように、テーブルが置かれました。トイレ場も完成です。

各自昼食後、安全に作業するためのレクチャーを受けて4班に分かれて全員がノコを腰につけ、ヘルメットで森に入りました。登山道のないところを藪こぎをして急斜面の林に分け入って行くのです。私は藪こぎが一番の難所でした。太い杉の除伐は私の力ではとても無理でした。それでも大きな杉が切り落とされると、成長が妨げられていた広葉樹が気持ちよく見渡せ、遠くにブナの森が見えました。

作業を終えてベースキャンプに戻ると、料理担当者らが作った豚汁、きのこ汁、おでん、もつ鍋、タコや、ギバサ（私は初めて食べました）など盛りたくさんの夕食に感激でした。各地の銘酒7升が一晩で無くなったのですから恐るべし！です。満天の星が素晴らしかったです。20日も終日作業しましたが、東京組は赤石川源流の沢歩きに出かけて行きました。

21日は青森支部事務局長の須々田さんらの案内で、クマゲラの森観察にワクワクして出かけました。初めて白神山地のブナ原生林に足を踏み入れるのです。村田さんの著書でクマゲラの森のブナの美しさはブナ社会の一面を反映しているとあります。スラリと直立するブナはそこが土壌の安定した浸食の少ない緩斜面だからとのこと。下枝がなく林床には植物はありません。クマゲラは直立した姿のいい木に営巣するそうです。野幌森林公園にも営巣していますがあまり見かけないのはいい幹が少なくなっているからでしょうか？キノコは倒木にたくさんありました。多くの生物が息づいている白神山地のブナ林。樹



端正な岩木山が見えました

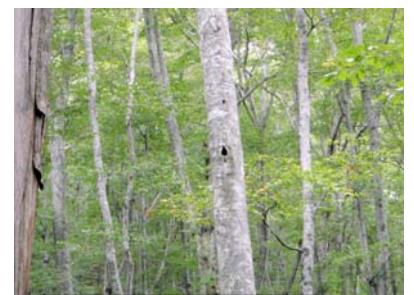


齢300年の大樹もあれば、まだ若いブナもありました。世界遺産に指定されて観光資源として売り出す一方で、青森の人たちが育ててきた自然に親しみながら山菜やキノコを取る文化が大事にされないのは間違っていると思います。森から人を締め出しては、森の恵みを体験を通して知ることも出来ないと思います。

私も実は世界遺産だから見たいという安易な気持ちで参加しました。現場で見聞きしたり、白神山地のブナ林保護のために春秋林道に反対してきた経緯を本などで知り、世界遺産になったことが本当に良かったのだろうかと考えさせられました。（左写真 クマゲラの森で）

21日は旧岩崎村の山小屋に6人で泊まり、小屋の管理人、鹿内さんがその場で作る手早く美味しい料理に感嘆しました。教師を定年退職してから漁師になった人です。キノコには詳しいし、野ブドウを取ってきてフランスワインに負けないワインも作ります。野に海にと忙しく楽しんでおられます。ヒマラヤ環境調査トレッキングでお世話になった弘前の村田さん、東京の山川さんとも会えて楽しいひとときを過ごせました。

22日は雨で白神岳登山はあきらめ、村田さんの案内で十二湖を散策。途中土砂降りになり、ブナの幹から勢いよく水が噴き出している珍しい光景もみました。インクを流したような美しく神秘的な青池は残念ながら雨で黒かったです。たくさんの出会いがあったいい旅でした。



クマゲラの営巣木

山のトイレ問題が深刻です

幌尻山荘排泄物搬送事業に参加して

毎年行われている幌尻山荘の汲み取り作業は7月は雨のため中止となり、8月実施と9月13日が2回目でした。当日は朝から雨が降っていて実施できるのかと心配しましたが、小雨決行。登山者や、開発局の若い職員など33人が参加し、459,5kgを超える排泄物を担ぎ降ろしました。

額平川の渡渉は、お尻が隠れるほどの深さの所もありました。一斗缶を背負った人たちの長い列が壮観でした。

水力発電機故障で幌尻山荘のバイオトイレが稼働しておらず、貯留式の固液分離の屋外仮設2基、山荘内1基がフル稼働状態でした。そのため大量の運搬になりましたが、全ての排泄物を運搬することが出来ました。

バイオトイレが稼働してもしばらくは、事業は続きそうです。小屋の使用料1500円は安いとの声もあるのですから、値上げしてヘリコプターでの搬送も考えられる時期に来ていますね



日本山岳会北海道支部の会員5人が参加しました。

日高山脈ファンクラブの主催でしたが、平取町山岳会、労山、日本山岳会北海道支部、リコー北海道山岳部と山岳団体が多く参加して、足並みもそろい北電の取水ダムから1時間半で山荘に着きました。

山のトイレデーは樽前山で行いました

9月6日は全道一斉山のトイレデーでしたが某登山教室の7日に樽前山で行いました。

あいにくの雨で私たち以外の登山者はいませんが、バスの中でマナー袋とマナーガイドを参加者に渡し、ティッシュはどんな山でも持ち帰ってくださいと訴えました。

この運動もすっかり定着したように思います。高山植物パトロールも、全道で一斉にやってみるといっても、インパクトがあつていいですね。

登山とは無縁の人から、「山できれいな花を取ってきてよ」と言われたと聞いた事があります。背景にはガーデニングブームがあるようです。まだまだ高山植物の大切さが伝わっていないのかとショックを受けました。運動も楽しく山の自然を守って行けたらと思います。



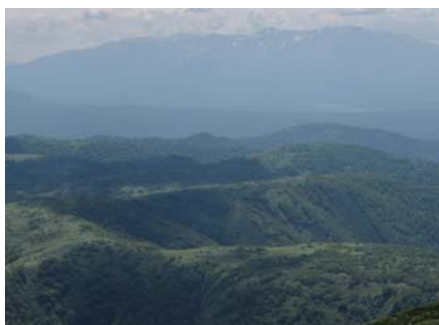
みな子の山旅日記

天塩岳 1558m 北見山地の最高峰

8月8日に天塩岳ヒュッテに泊まり、9日天塩岳に登りました。山岳会の山行です。

日曜というのに登山者は少なく、私たち10人と山頂で2組の登山者に会っただけ。思いがけなく静かな山を満喫しました。

ヒュッテ前を6時半に出発。沢音が涼しげで心地よい。アリドオシランやイチヤクソウがたくさん咲いていました。連絡路分岐から前天塩岳を目指しました。ガレ場の急登。胸突き八丁の苦しい登りが続きます。前天



塩岳に9:45着。天塩岳までの稜線歩きが気持ち良かったです。前天塩岳から大きく丸みを帯びた山容が美しい天塩岳が目の前に見えます。

オトギリソウがいっぱい。ツルリンドウ、コモチミミコウモリ、ミヤマホツツジ、ミヤマキンバイ、リンネソウ、シラネニンジンなどいっぱい咲いていました。エゾカンゾウの群落がきれい。ナキウサギの声はすれど姿はみえず。頂上には11:30

山頂からは東大雪、北大雪、表大雪の展望がのびやかに広がり圧巻。こんな青空の山は久しぶりでした。ランチタイムとし12:15出発。立派な避難小屋のトイレを利用し、丸山を通過して新道分岐コースをたど

りました。丸山付近ではエゾノゴゼンチバナの赤い実がたくさんあり可愛かったです。登山口15:40クールダウンをして登山を無事に終えました。

平山 1771m 生々しい熊の糞がたくさん



8月20日、午後からは雨の予報でしたが山仲間9人で平山に登って来ました。

行雲の滝、冷涼の滝を過ぎるころまでは青空で山頂への期待も。垂直に落下する滝が壮観です。

今回は私が一番前を歩きましたが、滝を過ぎた頃から、大きな熊の糞が点々と続いていてまだ新しく、そんなに時間がたっていないようでした。私は丁度、罨撃ちを読んでいたので、熊の存在がリアルに感じました。後ろの男性陣が笛を鳴らして警告しながら歩きました。登山者は平日ということもあって、私たちだけでした。

第一雪渓では、エゾノリュウキンカが沢を埋めていました。第二雪渓添いのお花畑が素晴らしかったです。ヨツバシオガマ、ミヤマリンドウ、チシマキンバイソウ、エゾウサギギク、アオノツガザクラ、ウメバチソウ、等々。分岐まで来るとコマクサ、イワブクロ、メアカンキンバイ、ウスユキトウヒレン、タカネシオガマのピンクが鮮やかで可愛い。頂上からの展望はありませんでしたが、たくさんの花に出会えて楽しい山でした。雨に合うと思いながらの登山でしたのでラッキー！静かな山と高山植物を堪能しました。

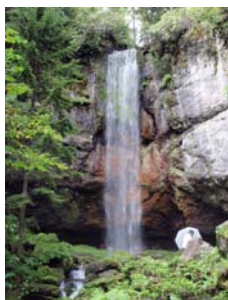


タカネシオガマ

登山口 8:00 冷涼の滝 8:40 第一雪渓 9:25 第二雪渓 10:15 1737m標高点 10:45 頂上 11:05 第二雪渓ランチタイム 11:50~12:10 登山口 13:50



メアカンキンバイ



帰りは丸瀬布の高さ28mの山彦の滝を見学。なかなか壮観でした。



アオノツガザクラ

山行記

快適な尾根歩き
ウベベサンケ山

9月4日に山仲間と秋晴れのウベベサンケ山（上土幌町）に登ってきました。ウベベサンケスプリとは春の雪解け水を出し出す山という意味だそうです。糖平温泉を5時に出発。車で行きつ戻りつしてようやく登山口の標識を見つけ、6時15分に登山口を出発。稜線に上がるまでは深い笹に覆われていて眺望もお花もなく一番つらい登りでした。

1399mの小さなピークに7時50分着。視界が広がり、眼下に糠平湖の前に並んだ溶岩円頂丘の山群がユニークです。ここから右に大きな1610m峰、ピークを目指します。ハイマツと笹の尾根道がづらい登りでした。一気に高度感が増し稜線の秋風が心地よい。8時50分着。

1610mのピークを過ぎると視界が開け、長い稜線からのびやかに走るたぐさの尾根が見渡せて高山にきたなあと足も心なしか軽くなりました。ウベベサンケの優美で伸びやかな大きな山塊が目の前に広がっていました。足元には、真っ赤に染まったウラシマツツジが初秋を告げていました。コケモモの赤い実も青い空によく映えます。菅野温泉コース分岐からは快適な尾根歩きでした。東端のピーク、一等三角点のある糠平富士に10時40分着。登山者は私たちだけ。頂上からは、鋭く天を突くニベソツ山や、トムラウシ山、十勝や東大雪の山々が見え嬉しかったです。1時間飽かず360度の眺望を楽しみました。大雪山系はこれからは紅葉のピークを迎えますが、一足早く静かな秋を楽しみました。（樋口みな子）



初秋のウベベサンケ山で。左端が筆者。後方にニベソツ山、その奥にトムラウシ山がクッキリと望めました＝9月4日

当別丸山 482m と 桂岳 734m

ブナ林の山と知られざる山



展望台からの函館山

山岳会のお月見山行で10月3日、函館に向かいました。13時、北斗市（旧上磯町）の当別トラピスト修道院に集合して当別丸山に登りました。修道院の裏に回ると牧草地が広がっています。暗い杉林を行くと、蔦にからまるルルドの洞窟に着きました。異国に来たような雰囲気です。やがて明るいブナ林の尾根道をたどると見晴らしのいい展望台に着きました。

函館湾の上に島のように見えるのが函館山です。こういう開放感は道南の山でしか味わえないと嬉しい。急な登りもありましたが、ブナの柔らかな林が快適でした。頂上には14:45ででした。頂上には珍しい天測点がありました。自然児学校で登ったペラリ山にもありました。天測点は天文測量に使われていましたが、現在は使われていないそうです。登山口には16:00。その後木古内にある枕木山荘に移動し、懇親会になりました。

この日は中秋の名月。道南の会員の温かいもてなしで総勢23人、山深い宿で素晴らしい名月を楽しむことが出来ました。

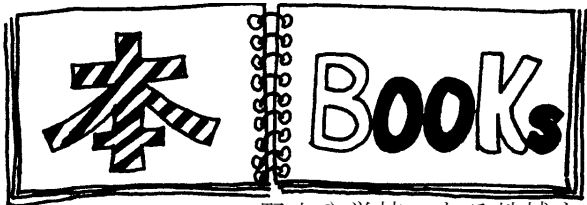


翌日の4日は雨模様。桂岳登山は出来るのかと心配しましたが小雨程度。枕木山荘から更に奥と続く林道を進むと施錠したゲートがあります。大きな車は無理かなと思いましたが地元の会員は慣れていて、左側を上手にすり抜けました。ぬかるみの林道をゆっくりと進むと桂岳の標識が見えました。そこに5台の車を駐車し登山開始8:30です。小さな川を渡り、うっそうとしたトドマツ林の尾根道を進みます。雨で濡れて滑りやすい。慎重



に歩を進めながらも急登ではずるっとなることも。まもなく北斗市と木古内町の境界尾根に立つ鉄塔が見えてきました。少し上がり、反射板ピークを頂上としました。10:40 右写真の標識は道南地区のSさん、Kさん、Yさんの合作。Uさんが登山口から背負って来ました。下山は12:00でした。

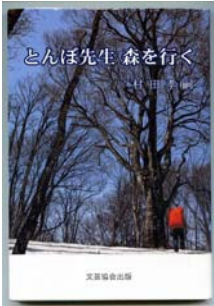
曇り空で眺望はなかったけれど、未知の山を探検するような楽しさを味わいました。左写真は札幌ではみないツチアケビです。



「とんぼ先生 森に行く」

村田 孝嗣著 青森県文芸協会出版 1500円

問い合わせは村田孝嗣さんへ t-murata@aqua.plala.or.jp



野山や学校のある地域を生徒と遊びながら、感じたことや、白神山地のブナ原生林への思いなどを書きとめていた文章を一冊にまとめたのが本書です。

村田さんとは昨年4月日本山岳会のヒマラヤ環境調査トレッキングで知り合いました。弘前周辺の中学教師を定年退職したばかりですが、春秋林道の建設に反対する市民運動を通して、白神山地のブナ林を自然と人間の関わりを大切に作る場であって欲しいと語り続けています。私と同年代です。

僻地校である小国中学や西目屋中学での生徒や父母との交流が楽しい。なんでも中途半端には出来ない気性らしく、村おこしでイワナの薫製作りまでしてしまう人なのです。私は小国が民話に出てくる世界のように思えました。ワラビ遠足もその一つ。遠足コースで

村田さんが見つけたヒメクロサナエという美しいトンボの羽化を見守る子どもたちの感動が伝わってきます。

「生きていた廃村」平沢を村田さんが訪れるようになったのは廃村になって7～8年もたってからのことだったという。人の住まない村で毎日、庭でもない道の草取りをしているおばあさんに声をかけたのが中村マサさんでした。ぼつぼつと話し出すマサさんの姿がいとおしく、どんなにこの村を愛し、かけがえのないところであったかがひしと伝わってきます。村田さんは「その間、村の人たちの心は一時もこの村から離れることはなかったのだ。改めて村を眺めると、そこにもここにも村の人たちの生きている心が読みとれた。空き家の縁側に張られた物干し用の縄、板を打ち付けた窓にはさんである、刃の錆びていない鎌。一草は茂っているものの取り除いた石をよせてある畑」と書いています。それらの情景が目につくようで、ふいに私が子どもの頃、足しげく通った日高の祖父母と重なり目頭が熱くなりました。

沙流川のそばに立つ大きな平屋の周りには小高い丘があり、馬がのんびり遊んでいたし、家族が食べる分だけのリンゴやグスベリや、カリンズがいつも目の前にありました。祖父母が亡くなり、すっかり足が遠のきました。今はその周辺は釣り堀になり、かつてを偲ばせる物は何もなくなっているようです。

白神山地のブナ原生林は世界遺産になったけれど、入山規制をすることが自然保護なのか？と鋭く問いかけています。白神山地の源流域は入山許可が必要になり、生態系に悪影響を及ぼす行為として、釣りも焚き火も山菜やキノコを取ることも禁止されてしまったという。村田さんは規制による保護の考えは、長い目で見れば、結果的には森のためにはならない。白神と人との関わりを断絶させ、地域文化を崩壊させようとしてしている。ブナの森の自然を世代を超えて伝えようとするなら、森の恵みを知る人を育てなければならないと、自らの教育実践に裏打ちされて納得します。白神山地のブナ原生林は、多くの生きものの生活を支え続けて、ブナ社会として生きています。未来を生きる子どもたちにこの豊かな自然を引き継ぐことだという言葉は説得力があります。観光気分で見たいと思った自分を恥じる思いでいっぱいになりました。

どのページを開いても、子どもたち、村人、鳥、虫たちへ寄せる並大抵でない愛情が感じられて、それでいて少しも押しつけがましくなくて共感しながら読み終わりました。

東北の人の粘り強さも随所に感じました。高校生の頃から大学1年までの毎週の岩木山登山は100回に達していました。そこからの村田さんがすごいです。山の自然に全く無知であると気づき、植物や動物に目を向けるようになったと語るのです。深く自然を探求してきた村田さんの人生の豊かさに羨ましさや感動を覚えました。お勧めの一冊です。

「生物と無生物のあいだ」福岡 伸一著 講談社現代新書 740円

生命とは何か、生物を無生物から区別するものは何かということをも生物学者である著者が「生命とは動的平衡（絶え間なく壊される秩序）にある流れである」という動的平衡論をもとに考察した本です。

文章が詩的でリズムカルで、読者をぐんぐんと引き込んで行きます。生物学とは無縁な私でも一気に引き込まれていく面白さでした。

導入が映画のシーンのよう。マンハッタン島を遊覧する観光船サークルラインから始まります。観光船から見える風景は、クィーンズボローブリッジ。サイモンとガーファンの曲にも歌われている。さてどんな展開になるのかと思うと、野口英世が研究した大学へとつながるのでした。日本では優れた生物学者とし名高い野口英世の米国での評価はさんざんなこと。日米での研究者や大学のあり方の違いや、ノーベル賞に輝いた「DNAの二重らせん構造解明」にまつわる盗用疑惑など、研究者の地道な努力だけで



はない、し烈な闘いの一端も伺い知ることができました。

「小石も貝殻も原子が集合して作り出された自然の造形だ。どちらも美しい。けれども小さな貝殻が放っている硬質な光には、小石には存在しない美の形式がある。それは秩序がもたらす美であり、動的なものだけが発することができる美である」。動的な平衡とは、生命の本質であると同時に著者の心のありさまであることに気づかされます。

エピローグに少年時代にトカゲの卵を毎日観察した時の苦い思い出を語っています。傷をつけてしまったらそこに息づいていたものを元通りにすることはできないということを知った体験は、今でも心に宿っている諦観のようなものになっているといいます。私たちは絶え間なく壊れ続けている。そうして迎えている日々がいつもと違う目で見えます。

上質な小説を読んだような不思議な感動を覚えました。



「自然保護を問いなおす」環境倫理とネットワーク

鬼頭 秀一著 ちくま新書 760円

第1章、環境倫理思想の系譜では、欧米の環境思想の系譜を18世紀から体系立てて説明し、自然保護という思想の流れを歴史的に考察しています。1970年代以降は自然保護から環境主義へと転換。第2章、新しい環境倫理を求めてでは、人と自然との関わりの全体性を捉えるために、自然との多様なリンケージ（社会・経済・文化・宗教）を全体性として提唱しています。第3章、白神山地の保護運動をめぐってでは、新しい環境倫理を白神山地の保護問題を具体的に論じています。

著者は自然は人間との関係性の中にしか人間に開示されないが、逆に人間も、それ自体として他から離れて存在しているのではなく、「生活」や「生業」という二つの方向性の違った働きかけの営みの中で、自然によって規定された存在である。そして自然は、その人間にとってやはり「生活」や「生業」という二つの働きかけの営みの中に人間とのかかわりにおいて全体性を持ったものとしてたち現れているのだと述べています。

私たちに欠けていたのは、「関係」という視点だと気づかされました。

白神山地に対する自然との関わり、人と人との関わりのある方が秋田県と青森県では違うというのも、先日青森の人たちと話してみても分かったことでした。秋田県側では入山料の徴収や保護の問題、さらに遭難者の捜索の問題を事務的に処理しており、そこには共同体意識は希薄だといいます。しかし青森県側は、上記のことがらに対して、昔の共同体での対応、処理のやりかたをそのまま踏襲しているといいます。人と人との関わりや自然との関わり方が基本的に違うのだといいます。青森県では、山菜やキノコを次の世代に残すような採り方をしてきた文化がありました。

著者は都会育ちで「切れている」人間と表現。いかに人とつながることができるかという模索をずっと続けてきたといいます。少しでもつながっている人たちに学びながら、そういう人々につながってきたそうです。

サンルダムや千歳川放水路問題では、さまざまな人とつながりながら、運動を進めてきたように思います。成果はすぐには現れませんが、人と人のつながり、自然とのつながりはとても大事なキーワードだと思います。

世界遺産の周りでは、観光客が押し寄せ、知床ではゴミや大量のし尿の問題が起きています。地域の人たちとつながり、その文化や伝承を大事にする視点で豊かな自然を守っていかなくてはと思いました。

白神山地を世界遺産に登録した本来のねらいは、国や地方行政による国有林の乱開発に歯止めをかけるためだったはずですが。それが森から人を締め出すことになったのは本末転倒だと思います。実際、クマゲラの森は奥深くとても観光では入れない所でした。私はどれが食用で、どれが毒があるキノコかさっぱり分かりません。何代にもわたって受け継がれてきた文化が失われるのは残念です。私はよそものですがなんとかつながっていい方向を見いだしたいものです。



9.22 黒い青池

ブナ林再生事業に参加したついでに白神岳に登る予定でしたが、土砂降りになりあきらめました。弘前の村田さんが案内してくださったのが十二湖です。天然のブナの森が素晴らしかったです。インクをこぼしたように見えるという青池は雨で灰色でした。落ち葉がいろんな形に池を彩り、大きな魚が泳いでいるかのようでした。（左写真）今度行くことがあったらブナの森をゆっくり散策したいな。

「罨撃ち」 久保 俊治 小学館 1700円

著者は道東の標津町で牧場を営みながら罨を追うハンターです。獵犬フチとの一部始終を臨場感あふれる文章で活写したノンフィクションです。

愛犬フチが賢く、著者の分身のようにヒグマに気づかれぬように追いつめていくシーンは、ハラハラし通し。探検家は極限に挑むことで生きていることを実感するといいますが、この著者もそのようです。ヒグマとの息詰まるような攻防が描かれます。著者とフチの息づかいが聞こえてくるようでした。ヒグマを倒した時、生命の尊さを実感する著者の感性に好感が持てました。山暮らしが長くなると感覚が研ぎ澄まされて時計も使わない。太陽の高さと自分の体内時計とでも何も不自由を感じなくなると書く。まるでデルス・ウザーラのような。自然と一体化しているのでしょう。

私は獵そのものより、フチが人の言葉を理解して、完璧な仕事をやり遂げるのに驚きました。

フチが弱って最後のふたり？での山行の描写が印象的。フチとの深い絆は肉親以上に思えました。本のタイトルはフチ物語のほうが良かったと思うのは、私が女性で獵に抵抗があるからでしょうか？



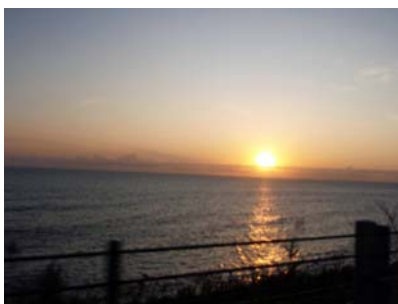
オムシャヌプリ西峰 1379m

9月26日支部山行で、オムシャヌプリに登りました。天満街道の翠明公園のロッジに泊まり翌27日6時半、全員沢装備で出発。Tリーダー以下メンバーは13人です。駐車場から林道を歩き、上二股の沢の渡渉は3回だけ。岩場を選べば登山靴でもOKでした。610mの出合いの石積みゴロ帯でメンバーは沢靴から登山靴に履き替えました。私は登山靴を持ってきてなくそのまま涸れ沢を進みます。崩落した巨岩が累々と続きます。浮き石も多く緊張を強いられながらも何とか突破。8:00、850mの巨岩石に到着。さらに急傾斜の登りが続き、緊張しながら慎重に進みました。

1308mのコルの手前から左折しハイマツをかき分けながら進むと頂上1379mのオムシャ西峰に10:40着。

オレンジと黄色のグラデーションが美しい紅葉と日高の山並みが素晴らしい。頂上からの眺めは最高！空が抜けるように青い。

下山開始。途中、きのこ等を少しだけいただき、翠明公園には14:40でした。久しぶりに登山道のないワイルドな登山。野趣にあふれ日高らしい深い溪谷やハイマツ漕ぎで登山の原点を味わえ楽しかったです。(4~5面の山旅日記の続きです)



9.4 太平洋に沈む夕日

行事に追いかかれ銀河通信の発行が遅れました。また映画は数本見たのですが、これはという作品に巡り会えませんでした。芸術の秋なのに残念です。またいいなと思っている映画は、地味なのか上映が短い期間で終わっていることもありました。次号ではお勧めの映画を紹介したいと思います。だんだん書くスピードが落ちています。もう少しゆとりある時間の使い方をしたいものです。新型インフルエンザが流行っています。夫の勤務する中学でも学級閉鎖が続いています。みなさまもお気をつけてお過ごしください。(みな子)

購読料をありがとうございます

09.8.10~10.9 (敬称略)

岡田秀二 (北広島市) 2,000円 (12号分) 富澤克禮 (小平市) 5,000円 (カンパも含む) 千葉朋代 (札幌市) 5,000円 (カンパも含む) 佐々木孝雄 (札幌市) 2,000円 (カンパ) 長島香 (札幌市) 10,000円 (カンパも含む) 里見清子 (甲府市) 5,000円 (カンパも含む) 世古勇 (江別市) 2,000円 (12号分) 板橋雅子 (旭川市) 5,000円 東直美 (札幌市)
合計37,000円は印刷と送料に使わせていただきます。